

奈良で学ぼう！

奈良の地で 学び 創造 教育 発信

国立大学法人
奈良教育大学
NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

<http://www.nara-edu.ac.jp/>
〒630-8528 奈良市高畑町 TEL.0742-27-9105
（奈良県高畑町・JR奈良線より市内循環バス（約10分）で高畑町（奈良教育大学）下車）

教育学部	学校教育教員養成課程 教育・発達基礎コース 言語・社会コース 理科・生活科学コース 身体・表現コース	総合教育課程 文化財・創造芸術コース 国際教育コース 科学情報コース	大学院 教育学研究科 学校教育専攻 教育実践開発専攻 教員教育専攻	専攻科 特殊教育特別専攻科 附属中学校 附属小学校 附属幼稚園
-------------	--	---	---	---

Nara
University
Of
Education

奈良の地で 学び 創造 教育 発信

国立大学法人
奈良教育大学
NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

<http://www.nara-edu.ac.jp/>
〒630-8528 奈良市高畑町 TEL.0742-27-9105
（奈良県高畑町・JR奈良線より市内循環バス（約10分）で高畑町（奈良教育大学）下車）

教育学部	学校教育教員養成課程 教育・発達基礎コース 言語・社会コース 理科・生活科学コース 身体・表現コース	総合教育課程 文化財・創造芸術コース 国際教育コース 科学情報コース	大学院 教育学研究科 学校教育専攻 教育実践開発専攻 教員教育専攻	専攻科 特殊教育特別専攻科 附属中学校 附属小学校 附属幼稚園
-------------	--	---	---	---

奈良大学

奈良で学ぼう！

奈良の地で 学び 創造 教育 発信

国立大学法人
奈良教育大学
NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

<http://www.nara-edu.ac.jp/>
〒630-8528 奈良市高畑町 TEL.0742-27-9105
（奈良県高畑町・JR奈良線より市内循環バス（約10分）で高畑町（奈良教育大学）下車）

教育学部	学校教育教員養成課程 教育・発達基礎コース 言語・社会コース 理科・生活科学コース 身体・表現コース	総合教育課程 文化財・創造芸術コース 国際教育コース 科学情報コース	大学院 教育学研究科 学校教育専攻 教育実践開発専攻 教員教育専攻	専攻科 特殊教育特別専攻科 附属中学校 附属小学校 附属幼稚園
-------------	--	---	---	---

奈良教育大学広報誌

Nara University of Education
Summer 2006

夏
2006

大学広告パネル案紹介

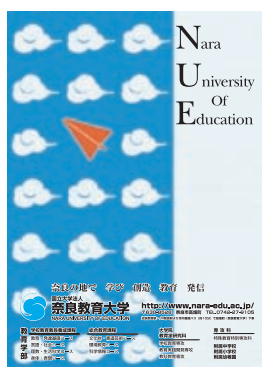
近鉄奈良駅構内に大学広告パネル（P7参照）を平成18年5月から設置しました。
7月末にリニューアルをする予定で学生に制作を依頼したところ、本学の卒業生を含めたプロジェクトを立ち上げ、「奈良の地で」「学び 創造」「教育 発信」のキャッチフレーズを学生のイメージで表現してくれた3つの作品となりました。
今後は、広く学生から作品を募る予定です。

デザイン案A



「大学」を連想させるモチーフを使い、「学び 創造」「教育 発信」のイメージを具現化しようと発案。構内にある備品などを使う案もあったが、最終的に「学生自身」で体現しようというに至った。2人で寄り添うとできあがる「NUC (Nara University of Education)」の文字。奈良の地で一緒に学び、成長していこうという思いを表現している。「奈良」のイメージを印象づけるため、モデル学生に鹿の角をモチーフにしたカチューシャを被せ、少し遊び心も加えて親しみやすさを強調した。

デザイン案B



奈良の特産のひとつでもある「奈良晒（さらし）」や「蚊帳」にヒントを得て、「手ぬぐい柄」をイメージしたデザインを考えてみた。
「空」は「大学・社会」、「紙ひこうき」は「未来へ飛躍する若者」を表現している。古都奈良町といった「和」のイメージを強調するため、それぞれの図案は「手ぬぐい」に染め抜かれた柄を表現すべくアレンジを加えている。和風でありながら、かたわらに欧文表記を配置し、「北欧デザイン」のテイストも意識。「古風」に偏らないよう配慮した。

デザイン案C



「若者の写真」というリアルな実像に、手描きの伸びやかさを加えて加工。デザイン案Bの「手ぬぐい柄」の要素を背景に生かし、ファブリックアート（布の柄としてのデザイン）を意識した。
胸元から飛んで行く紙ひこうきのイラストは、モデル着用の実際のTシャツの柄から剥離して飛んで行くようなイメージ。

プロジェクトチーム

学校教育教員養成課程身体・表現コース3回生 榎原ひかり、高橋真弓、平原奈津美、増田恵子
平成6年度大学院修士課程美術教育専攻修了 廣田真理

4 【学長×学生対談】

少人数教育の利点

6 大学の取り組み

理事・副学長（教育担当） 重松 敬一

8 【ラボレター】

高円山を眺めながら

国語教育講座・教授 棚橋 尚子

算数・数学が好きですか？

数学教育講座・助教授 川崎 謙一郎

教育大学における教育と研究に奮闘中

生活科学教育講座・教授 内田 恵美子

子どもたちのために、障害児のために

教育実践開発講座・教授 郷間 英世

10 【ひと・あれ・これ】

最高のクラスを目指して

枚方市立楠葉中学校・教諭 中島 毅士

ヒト・モノ・デザイン

BLUE MOUSE BOX イラストレーター&デザイナー 廣田 真理

11 課外活動 水泳部・ギターマンドリンクラブ

12 【附属校園では】

公開保育研究会の開催

附属幼稚園・副園長 上野 由利子

地域教育懇談会・理科フィールドワーク「奈良公園の自然に親しもう」

ー親子・教員・地域の自然観察ボランティア合わせて280名がにぎわうー

附属小学校・教諭 井上 龍一

「火星探査」からロボットコンテストへ。そして、世界3位に！

附属中学校・科学部顧問 福田 哲也

15 新入生合宿研修

学生委員会委員 大山 明彦

16 【大学の仲間たち】

メスグロヒョウモン

自然環境教育センター長 前田 喜四雄

少人数教育の利点

奈良教育大学の特色の一番トップにあげられる少人数教育。先生と学生の距離が近く、充実した大学生活が送れるというその実際のところはどうか。今回、柳澤学長と学生の対談という初めての試みで語っていただく機会を得た。

参加した学生は4人。学校教育教員養成課程言語・社会コース4回生の土井好美さん、学校教育教員養成課程教育・発達基礎コース3回生の北川雄介さん、学校教育教員養成課程身体・表現コース1回生の井門まなみさん、そして日本語・日本文化研修留学生のトマシュ・マリノフスキさん。柳澤学長との対談ということで少々緊張気味だった彼らも、次第に和やかな雰囲気溶け込み、感じたままの率直な感想を話してくれた。

▼少人数教育を経験して

柳澤学長 少人数教育は、小規模にしかできない特色がたくさんあるんですね。例えば、先生が学生諸君と非常に近いところにいる。無理やり先生方が学生に近づこうとしなくてもいい、家族的な雰囲気や育まれていたりします。また、同じように学生同士の距離もやっぱり相当近いんだと思います。率直になんでも疑問に思ったことを尋ねてみたい、あるいは一緒にやろうと提案してみたり。

あと、具体的などころでお話すると、一年生のときからゼミをやっています。これは本学がもう平成7年ぐらいですから、足かけ10年ぐ

らい。他の大学に先駆けて少人数教育が大事なんだと、かつ私たちの規模の大学ならできるんだということで丁寧にやってきました。皆さんは、一年生のときに

は基礎ゼミがあり——あれはちょっと規模が大きいんですけど——ディスカッションするときには小さなグループになるので、新入生が始めて入ってきて右も左も分からないときに、みんなどんなことを考えているのかな……という最初のとっかかりに非常にいいんだろうな、と思っています。

それから、ただ仲間内でワイワイというようになぞという意味での少人数ではなしに、そのなかでこんなことをみんなだまとしていこう、あ



柳澤学長の話に関心する土井さん、トマシュさん（画面左より）

るいはプレゼンテーション能力って呼んでますけれども、人の前で発表するときに、こうやってまとめてこうやって成果を発表して、それについていろんな人の意見も聞けるということ。その流れをやはり少人数教育というところで、なおかつ1年生や2年生の間にしっかり身につけてほしい、というのが少人数教育の前半の部分です。また、1年生だけが少人数教育かというとそうではなく、おそらくみんな経験してると思うんですが、2年生や3年生になってもそ



柳澤学長、北川さん、井門さん（画面左より）

の形は基本的には変わっていないと思います。
そして、最終的には卒業生の多くが「大学時代を振り返ってどう思いますか？」というアンケートに対して「授業の満足度」「大学の雰囲気」「少人数教育の良いところ」で良い評価をあげてくれています。そういったところで、非常に良い教育ができているんだろな...と思っていました。
進行 では、実際に4回生に入られて、卒論に取り組まれていると思うんですけど...。土井さん、少人数を体験されてみてどうでしょう？

土井 やはり、どんな学年があがるにつれて、私は専門が国語なんですけれど、ほんとに10人ぐらいの授業で、先生にわからないことがあったらその場で質問できたり、授業が終わってからも軽い気持ちで物怖じせずに関にいたりします。あと、今はゼミに配属されているんですけど、研究室も一人の先生にだいたい3人までくらいですごく充実していて、指導を一人あたりにかなりかけていただけるし、本当にこういうところが少人数の小さい大学としての魅力的なところだと思っています。

進行 3回生の北林さんはどうですか？

北川 そうですね、少人数の大学といっても、やっぱり高校までと比べたら規模は大きくなっていると思うんです。1回生、2回生、3回生と上がっていくにつれて受ける専攻とかがちよつとずつ決まってくるんで、基礎ゼミでも30人や40人いたりする授業があります。でも、2回生や3回生になったらそういう人数で受ける方が少なくなってきた、進みたい方向に行くにつれて少人数になっていくので、先生との仲も深くなりやすいです。受けている内容の質問であったり、自分が考えていることなどを先生に訪ねたり話したりしやすいですし、その授業の内容は年を経るごとに充実してきていると思います。

▼短い間で感じたこと

進行 では、いきなり1回生で感想というのも難しいかも知れないけれど、井門さんはどういうところに魅力を感じて奈良教育大学に？

井門 秋の文化祭に一回見学に来させてもらったんですよ。そのときの雰囲気がすごくよくて、大学中みんなが仲が良い感じだったんです。

部活単位というより、大学全体がすごく良い雰囲気を持っていて、ここはいいところだな...っと思っています。(笑)

大学に入ってから、先輩たちとの距離が近くて、今でもいろんな先輩に声をかけてもらって、すごく嬉しいですね。

進行 トマシユさんは、留学生として奈良教育大学を選ばれたわけですが、少人数教育の良さを感じられたことはありますか？

トマシユ 前に考古学を一年間勉強したことがあって、そこは非常に人数が多く、半年経ってもほとんど誰も知らないことがありました。そして、ここに来てまだ半年ですが、みんなと知り合えたり、分からないところがあればすぐに先生と相談できたりするので、少人数教育はとても良いことだと思います。また、授業には日本の学生も参加することがあるので、それも文化交流になって楽しいです。もし人数が多ければ、留学生と日本人がみんなそれぞれグループになっちゃうんではないかと思っています。それは、とても大切だと思います。

▼学生に対する想い

柳澤学長 大学の小規模なところと関連するとは思いますが、本学の先生方なんですけれどもね、学生の教育にやはり重きを置いている。教育に熱心であったり、学生のことを大事に思っている先生方が多いんだろうと思います。それは奈良教育大学に勤める先生方の一つの特徴なんだろうな...と私は感じているところです。

大学の取り組み

新たなチャレンジ

理事・副学長(教育担当)

重松 敬一

この4月に理事・副学長に就任しました。何かと不安な時代ですが、本学で学ばれたことを誇りにしていただける学園環境づくりを進めて参りたいと思います。

本学は国立大学法人になって3年目を迎え、例えば「教官」と呼ばずに「教員」と呼ぶなど、慣れとリズムが出来てきた一方で、新たなチャレンジにも取り組もうとしています。

4月にスタートしたもつとも大きな教育環境への取り組みは、**学校教育教員養成課程と総合教育課程の二課程の再編**でしょう。近畿の府県ではすでに徴候が見られるように、教員採用の大幅な増加が始まっています。平成19年度の大阪府・堺市の採用では、例えば、小学校約1300名といった大量の採用が予定されています。このような社会的な状況に対応できるように50名の学生定員を総合教育課程から学校教育教員養成課程へ移動させ、180名と75名とすると共に、総合教育課程のコース・専修は、文化・環境・情報キーワードに象徴される特色化を図るようしました。

再編とともに、初めて奈良県の高校に対して地域推薦入試を実施しました。結果的に、58名の志願者の中から11名の新入生を迎えることができました。6月14日に行った**地域推薦入学者との懇談会**では、次のような本学へのコメントが述べられています。

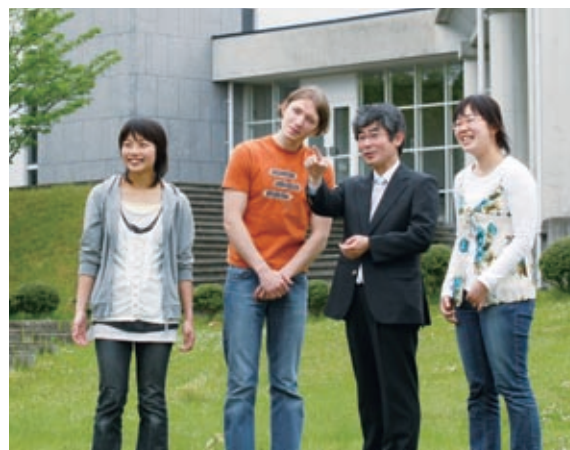
・教育大でみんな教師を目指しているけどいろんな考え方があっておもしろいと思う。

・授業で、もつと授業の教え方を習うと思っていたけど、結構自分で考える比率が多いというのは驚きました。
・お昼に幼稚園の子どもがいて良い環境だなと思う。
・空きコマを利用して勉強しているので、空き時間がある方がよい。
・奈良県の教師を目指す人には地域推薦を勧める。



地域推薦入学者との懇談会

懇談会と言えば、日本人や留学生の学生と学長との懇談会も開かせていただきました。本学



講堂前にて

の特徴を一言で言えば———という、次のような言葉が返ってきました。

・とにかくすぐなじめる学校です。
・日本学科の学生にとって、奈良ほど望ましいところはありません。
・アットホームな雰囲気、過ごしやすい大学です。

このような良いところはいつまでも大切にしたいものです。

今一つは、**大学院の現職教員新入生との懇談会**です。さすが現職教員だけに、普段の実践的課題の解決に果たす大学院での教育研究への期待が述べられました。

大学の取り組み

教育環境を保護者の方にご理解いただくためには、今年の入学式から「保護者のための入学式」と銘打って、入学式後の説明会を開かせていただきます。

また、新たに始まったこととして、奈良の地で学ぶ学生の皆様に、歴史的な伝統文化を直に味わっていただき、豊かな文化的教養を身につけていただく試みとして、国立奈良博物館と国立京都博物館との間で「キャンパスメンバーズ」制度を発足させました。詳細は学生支援課でお知らせしていますが、学生証を見せるだけで常設展から無料で何回でも入館できるのは魅力的でしょう。このことによって、奈良近辺での豊かな歴史・文化に触れ、それを教材と出来る教育者となってもらいたいものです。

このような歴史・文化に触れる機会は学内でも設けられています。旧教育資料館では「世界遺産ミニシアター」を開設し、視聴覚の面でも教育研究の充実を図っています。このミニシアターは、組織再編による研究環境の充実とともににより拡充されていくものと期待されます。なお、この組織再編は、従来の附属図書館、教育資料館及び情報処理センターを統合し、新たに「図書館部門」、「情報基盤部門」、「研究開発部門」からなる「学術情報研究センター」の設置（3月24日）からなるものです。

さらに、従来から奈良県教育委員会と教育研究連携事業を進めてきたところですが、この4月からは客員教授（常勤）を迎えることができました。学士課程の講義を担当いただくだけでなく、例えば、この8月17日、18日に奈良県教育委員会の共催のもとに開かれる「学校経営研修」事業の推進、教職大学院設置準備の事業推進などに早速取り組んでいただいているところ

です。

国際協力・地域連携といえば、2年目を迎えている「新世代の理数科教育を先導する理数科教員の養成（先導理数）プログラム」が、大和郡山市、曽爾村、奈良市一条高等学校と協力協定を締結し、学部生や大学院生がそれぞれに向いて理数科教育を支援するほか、教職員が互いに研修に向うことになっています。

ちなみに、現在遂行されているこのような教育プログラムには、平成15年度に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」、通称「特色GP」にいち早く採択された「現代的課題に対応する導入教育科目群の展開——「考える力」「表す力」の育成をめざした教育者養成」が最終年度を迎え、その成果をまとめています。また、現在、現在の教育現場が、新任教員に強く求める資質能力は、児童生徒、保護者、同僚に対する「対応力」ですので、教育実践で想定される様々な場面の中から、特に重要な「鍵的場面」を定め、それに対する「対応力」を学部学生と大学院生に育成するプログラム「大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成GP）」が2年目を迎えています。

そして、今年度からは、ハイデルベルク大学のボールゲーム学習理論に基づいて、附属小学校と協力しながら日本版ボールゲーム指導プログラムを開発し、体育・スポーツ分野において質の高い実践的指導力をもった教員及び指導者の養成をめざす「大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）」がスタートしました。いずれもその成果をご期待いただければと思います。

このように、国際協力・地域連携でも一層本学が期待される存在となるように新しい提案をして参ります。

附属学校では、中学校の科学部が、5月5日7日にオランダ・アイントホーヘンで行われた世界最大のロボットコンテストFLLで、ロボットパフォーマンス世界3位という快挙を成し遂げてくれました。

また、国立大学法人になって一層広報活動にも力を注ぐようにしていきます。例えば、近鉄奈良駅構内に広告パネルを設置したのもその一環です。写真のようなキャッチフレーズを見ていただいたでしょうか。



奈良の地で、学び 創造、教育 発信

今後、この広告パネルのキャッチフレーズやデザインなどは学生や教職員の皆様から応募してもらいたいと考えています。

これからも奈良教育大学は、少人数、国際協力、伝統文化、地域連携などの特色をもった学園として、より発展・充実させていく計画であり、そのためにも関係者の一層のご協力をお願いするものです。

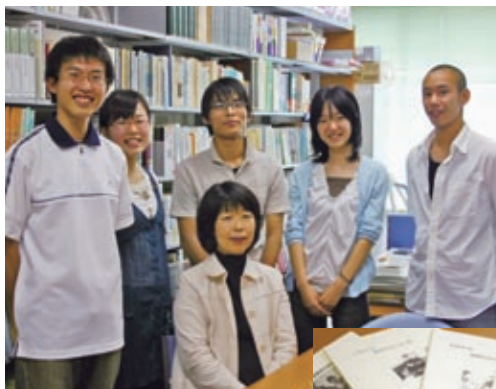
高円山を 眺めながら

国語教育講座・教授
棚橋 尚子

■研究の風景

私は学部時代、上代文学を専攻し祝詞（のりと）を研究テーマにしていたので、よもや自分が国語教育について大学で教鞭をとるようになるとは思っていませんでした。国語教育を研究するようになったきっかけは、学部卒業後中学校教諭として「荒れる学校」に赴任し、教科教育の重要性を思い知らされたことにあります。

その後、私は大学院、国立大附属小と生活の拠点を



ゼミ所属学生の皆さんと



研究室の文集

変えながら、次第に授業力の高い教員を育てたいと願うようになりました。私が今奈良教育大学にあるのはすべてその思いの結晶のためだと言えます。さて、国語教育という学問領域は、実際には大変広範なものです。そのなかで、ここ十年ほど、私は国語教育の基礎を支える「漢字指導」を中心に研究を進めてきました。学習負担の解明、漢字制限のあり方の検討などを経て、最近では、漢字に付されたルビが漢字習得や読解にどう関係するのかという点に研究の主眼を置いています。

■研究室だより

私の研究室は、教員になりたいという強い希望をもった学生や院生の集まりです。ゼミはディスカッションが中心で、毎回活発な討論が繰り広げられます。行事も多く、卒論合宿や卒業旅行などが恒例になっています。また、毎年研究室の文集を発行しています。卒業生や在学生在に原稿依頼をし、自分たちの手で製本まで行っています。行事はすべて学生が企画・運営しますが、これらは、力ある教師になるためのプログラムの一つだと考えています。

高円山を望む位置にある私の研究室は、基本的に学生には開放していませんが、コーヒースalonとしてみなさんの憩いの場となっています。主（あるじ）はちよつとばかり恐いようですが、どうぞいらしてください。

算数・数学が 好きですか？

数学教育講座・助教授
川崎謙一郎

専門は、可換代数学です。可換代数という広い意味を持ちますが、しばしば特異点の種類の判定に用いられる局所コホモロジー加群そのものの構造に焦点を当てて、現在研究に取り組んでいます。関連する種々の論文を読んでは、その理論の美しさに日々感動しております。可換環の類にGorenstein環というのがあって、ある種ヘッケ環の性質がそれにあたり、それがFermat予想の解決（1994年）に重要な役割を演じたこのことです。学部卒論指導については、本研究室では、やさしい数学の本の輪読・冊読破を目指しています。一方で、沢山のことを学ぶというよりは、より深い理解を優先しています。代数学の内容を活発に議論できたら最高ですね。本学の教育に関しては、広い意味での代数学において自分が受けてきた本当に小さな感動を、自分の言葉で学生の人々に伝えていきたいと考えています。「数学」に限ったことではないのですが、こと理数科教育に関しては、大学教育での学びですら目先の実用性や有用性が叫ばれ、数千年におよび人類が培ってきた純粋な学問としてのその大切さや重要性が軽視されて来ているのではないかと、学校教育現場を含め、日本の理数科教育の危機的状况が思われてなりません。



ゼミの学生と



対称性を記述する数学

数学は4000年の歴史を持つと言われてます。少なくともEuclid原論（およそ紀元前3世紀）が世に出て以来、即物的にお金になるために数学が進展してきたとは考えられません。でも数十年前、数百年前の数学が現在の私たちの実生活や私たちの社会に貢献していることは紛れの無い事実です。それを知っている諸外国の国々は、数学を非常に大切にしています。いろいろな人々の努力にも関わらず、今もなお、日本の学校教育における「理数科嫌い」問題の議論は絶えないところで（なぜでしょう?）。本学の教育の土壌で育った学生には、数学を学ぶにおいて常に向上心を持った数学教員になってもらいたいし、数学の本当の面白さ、大切さを伝えてもらえる「算数・数学の伝道師」になってもらいたいと希望しています。大きくなくいい、数学を学ぶ上で小さな成功体験を数多く積み重ねて欲しいと願い、そして算数・数学の本質を理解している算数・数学の教員になって欲しいと願いつつ、日々の授業の教材を毎日毎日こつこつと考えています。算数を教えるだろう学生のみならず、数学を教えるだろう学生のみならず。算数・数学が好きですか？

教育大学における 教育と研究に奮闘中

生活科学教育講座・教授

内田恵美子

■教育（専修専門科目）において

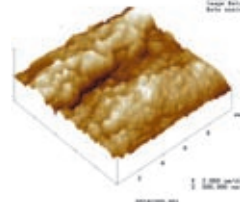
学校教育教員養成課程では、多くの他教科科目の履修が義務付けられ、被服学の必須科目は僅か2科目です。この中で、学生に教員として「家庭」の授業を担える知識と技能を習得させねばなりません。そのため、効率よく知識を体感的に習得できる学外実習（衣服が製品になるまでの全行程を行っている工場見学）を組み入れたり、理論に裏付けられた確かな技術を伝授する工夫など、限られた時間でより多くの成果を挙げ、る手法を日々模索しています。

■教育（教養科目）において

現在、学生も児童生徒もファッションには大きな関心をもっていますが、被服を身に着けることは、環境問題や健康、社会性、特に、非言語コミュニケーションの有効な手段であることなどを含んだ重要な事柄であることが認識されています。この重要性を認識してもらいために開講したのが「ファッション考」です。学生自らが思いをめぐらす講義にしたいと、方々に情報網をめぐらし、できるだけ



工場見学
（工場の組み上げ工程）



ポリ乳酸繊維の加水分解による
クラックAFM像（10 μm）

最新の話題を織り込み、興味を持てる内容にするために奮闘しています。

■研究において

家政学における被服学は工学と異なり、人間を中心とした学問です。私の研究は一貫して「ヒトにやさしい衣服」をテーマにやってきました。教育大では研究資金も設備も限られていますので、その中で行える研究を模索しています。最近では、衣服の安全性を確認する手法の開発と、環境にやさしい繊維の研究を行っています。前者は三次元培養皮膚を用いて、被服に使われている接触皮膚炎を引き起こす可能性のある加工剤や処理剤の安全基準を確立することです。後者は原子間力顕微鏡（AFM）を用いて生分解性繊維の分解挙動を研究しています。学生は、着心地のよい衣服の設計などにも取り組んできました。

子どもたちのために 障害児のために

教育実践開発講座・教授

郷間 英世

■近況

特別支援教育（障害児医学）を担当していますが、教育大学に来る前は小児神経医として、発達障害や慢性神経疾患の子どもと関わってきました。現在も大学教員として、また小児科医として、障害や病気を持つ人や家族とのつながりのなかで、仕事や研究を行っています。

■研究について

「QOL（クオリティオブライフ、生活の質）」が、私の研究の一つのテーマで、「障害や病気を持つ人も持たない人もQOLは本質的に同じである」という立場から、重度の障害や病気を持つ人のQOLが豊かになることを願って研究を進めています。

もう一つの研究は、「現代の子どもたちの発達」です。最近の子どもたちの発達は変容してきています。特に、描画能力の遅れは著しく、三角形が描けるようになるのは、20年前の子どもたちに比べ8カ月遅くなっています。さらに、人物の絵もアンバランスで、これ

は男児で著明です。また、絵がかけない子どもは、「集団行動ができてにくい」「きれやすい」など、行動上の問題を持つ子どもが多いようです。

■ゼミなど

担当している学生は、学部、情緒障害特別専攻科、大学院に在籍しており、ゼミの中で、各自テーマを持って研究しています。他に月に1回、土曜日研究会があります。ここでは、現職教員、心理士、他大学教員などの卒業生も参加して、現場での事例や研究結果を持ち寄って年齢や立場を超えて討論します。

また、レクリエーションも大事な学びの場です。山登りは四季を問わず行っており、雄大な自然の中で感じる風や香りは新たな活力となり、興味の幅も広がります。そのおかげかゼミ生たちの結束力（？）も高まり、そこでは活発な意見が飛び交います。

相談にこられた、
子どもさんと院生



1昨年の学生と雪山
スノーシュー

最高のクラス を目指して

枚方市立楠葉中学校・教諭

中島 毅士

一緒に過ごした1年

去年の4月の入学式での感激は、一生忘れることができないと思います。自分が担任するクラスの生徒が入場してきたとき、「教師になったんだ。この子達の担任になるんだ」と夢が叶った嬉しさから涙がこぼれてきました。そして、この子達と本音で語り合い、最高のクラスを一緒につくっていくぞと心に誓いました。

毎日、楽しいことばかりだと良いのですが、そう上手くはいきません。そんなとき助けてくれるのも生徒です。「先生、最近顔暗いよ、なんかあったら相談のるで」と言ってもらったこともありました。また、パワーをくれるのも生徒でした。そんな優しい生徒たちに囲まれて、1年間過ごすことができました。みんなで大声で叫んだ体育祭、放課後遅くまで練習した文化祭の合唱、グラウンドに出て、合唱の声出しもしました。そんな風に全力で子どもたちと突っ走っています。本当に、教師になれて良かったと実感する毎日です。

数学の授業風景



トコトン話し合う

「ピンチはチャンス」。これは僕が常に頭に入れているダイスキな言葉です。中学生は自分の気持ちに素直になれず、思い通りにならないことも多々あります。そんな時、頭によぎるのがこの言葉。生徒と話し合う時間をとって、ホームルームをして、子どもたちに色々なことを考えてもらえるチャンスなんです。そうして話し合いを続けていくと、子どもは必ず変化してくれる。成長してくれる。やっぱり教師で大事なものは、トコトン話し合うこと。何かが起こったときはチャンス！ そう思って毎日過ごしています。生徒の成長を見る時が一番嬉しいときです。常に話し合いを大事にして、最高クラスを目指していきます。

これ・あれ・と・ひ

ヒト・モノ・デザイン

BLUE MOUSE BOX

イラストレーター&デザイナー

廣田 真理

モノづくりの仕事は「学び」の連続

メーカーの企画部でデザイナーとして5年間勤めた後、フリーのデザイナー&イラストレーターとして独立し、4年が経ちました。勤務先では主に、ゲーム機で使用する景品のぬいぐるみや雑貨を中心に商品デザイン等に携わりました。学生時代に培ったデッサンの技術だけを頼りにモノづくりの世界に飛び込みましたが、入社当時は商業デザインはもとより、Macを使ったデジタルワークについても全く無知な状態で、仕事に必要なスキルや発注者の要求を満たす力量を身につけるには相当な努力が必要とされました。まさに「実務に勝るテキスト無し」。自分のセンスやスキルの壁にぶち当たったり、それを克服するために必死で頑張る…。そうして自分の手掛けたモノが市場に出回る快感。その繰り返しで得た経験は、自分にとって大きな財産になりました。

仕事が自分を選んでくれる不思議

独立後は、イラスト・カタログ・チラシ・ファンシー商品のデザイン等の制作に携わっていますが、ひよんなことから

デザイン専門学校で職業訓練講座の講師を担当することになり、巡り巡ってまた教壇に立つ機会を得ました。モノづくりの仕事も、訓練生への指導も、自分という存在が少しでも人や社会の役に立つという事は、とても意義深い事だと感じています。自分が選ぶのではなく、仕事の方が自分を必要としていて、自然とその環境に引き込まれる…。そんな巡り合わせの不思議をひしひしと実感する毎日です。大学で学んだ事、会社での経験、全てが今の仕事に繋がっていることへの感謝。またそれを自覚して、今後も色々なヒトやモノとの縁を大切に「創る」喜びを感じて行きたいと思っています。





水泳部

仲間がいるから頑張れる！

学校教育教員養成課程身体・表現コース3回生

水泳部主将 橋本桂子

現在水泳部は男子8名、女子12名で活動しています。小さい頃からずっと水泳を続けていた人や、大学に入ってから本格的に始めた人などレベルは様々です。部員同士でお互いを高めあい、水泳に関することを指摘しあうなど、みんなで力を合わせて、大会での上位入賞、各個人の記録の更新を目標に日々練習に励んでいます。活動は月曜日から金曜日まで、夏期には2回の合宿も行っています。顧問の先生はロサンゼルスオリンピック出場、国体50メートル自由形2連覇の実績を持つ若吉浩二先生で、シーズン中に一緒に練習することも多くあります。

大会は公認・非公認を合わせて年に10回ほどあります。大阪教育大学・京都教育大学・奈良女子大学と行う定期戦・三教一女戦や、関西学生選手権大会

など規模は様々で、他大学との交流も盛んに行っています。先日行われた京都学生選手権では、男女とも5位入賞という好成績を収めました。また今シーズンは、すでに多くの部員が8月に広島で行われる全国国公立大学選手権大会に出場を決めています。

中学校や高校のクラブとは違い、自分たちで部を運営することに難しさを感じることもあります。しかし、試行錯誤しながら部員みんなで作る活動やその雰囲気は、他の活動ではなかなか得られないものがあり、自分を成長させてもらえる一つの場であると感じています。また、練習を頑張った後はみんなでご飯を食べに行くこともあり、部活動以外の生活の面でも良い人間関係を築いています。

水泳は個人スポーツととらえられがちですが、それは違います。一緒に頑張れる仲間、切磋琢磨できる仲間、応援しあえる仲間、指摘しあえる仲間がいることで目標達成まで頑張ることができ、チームスポーツであると思えます。私たち水泳部は、一人ひとりの目標のために部員全員で挑むことを目標に、これからも頑張っていきたいと思っています。

課 外 活 動

ギターマンドリンクラブ

楽器を弾く楽しさを
知りました

総合教育課程科学情報教育コース3回生

正木健太郎



「マンドリン」…この楽器を知っている人はたくさんいるだろうか。少なくとも僕はこのクラブに入る前は知らなかったです。僕たちギターマンドリンクラブ（通称ギタマン）はマンドリン・マンドラ・マンドロンチェロ・クラシックギター・コントラバスの5つの楽器を使っています。活動としては12月にある定期演奏会、4月にある大阪マンドリン連盟に加盟している大学と行う合同演奏会の2つの演奏会ほかに、依頼演奏会や大阪芸術祭マンドリンフェアなどにも積極的に参加しています。部員のほとんどが初心者で、今まで音楽経験のない人がほとんどです。僕も楽器経験もなく譜面も読めませんでした。先輩から丁寧に教えてもらって今では楽器を弾くことが自分の趣味にもなりました。ギタマンは男子9名、女子30名が所属しているので学内での友達も増えます。前述した合同演奏会では他大学とも交流ができ、演奏以外でも合同合宿や淀川杯（ソフトボール大会）も行われるので学外の友達もたくさんできます。

大学に入って「何か新しいことをは

じめてみたい」という人にはこのクラブはぴったりだと思います。僕も新しいことを始めたいと思っています。一人で、一人で楽器を弾くこともできますが、みんなで一つの目標に向かってがんばっていく、みんなで一つの曲を仕上げていく…こんな大切なことを僕はこのギターマンドリンクラブに入ってから、楽器を弾く楽しさを教えてもらったのもこのギターマンドリンクラブです。今では、僕の大学生活にとってギタマンは欠かすことのできないものになりました。

幼稚園

公開保育研究会の開催

附属幼稚園・副園長

上野由利子

たくさんの方の参観者に囲まれて

附属幼稚園では毎年、公開保育研究会を開き、幼稚園を中心に幼児教育に関わる先生方に参加を呼びかけています。今年度は、去る五月二十七日に行いました。

当日は雨予報にもかかわらず、時折日の差すまずまずのお天気になり、附属幼稚園の豊かな自然を生かした遊びがあちらこちらで展開されました。この春に入園したばかりの新入児は、担任の先生との信頼関係ができ、幼稚園の生活がわかってきたところです。保育室周辺を中心に、戸外で草花の色水を作ったり、砂場で山や道を作り汽車を走らせたり、平均台やはしごを組み合わせて迷路をつくったりしてにぎやかに遊んでいました。また、子どもの森では、クラスの友達と一緒に先生を追いかけたり、たんぽぽの花を集めたりしていました。

年長児は、進級したときにクラス替えがあったのですが、気心の知れた友達ばかりです。友達と相談しながらサ-

キット遊びをしたり、仲間と力を合わせて砂場で長い水路をつくったり、虫を探したりなど、目的をもって友達と関わりながら遊んでいました。150名ほどの先生方が参観されていました。子どもたちはいつもと変わりなく自分たちの遊びに夢中でした。



お花をつかって色水あそび

今回の研究会のテーマは「自尊感の育ちを考える」としました。子どもた

ちに安心感を与えられる保育者であるよう心掛けながら、子どもたちが遊びの中で、喜びや楽しさだけでなく、めんどなどの心の葛藤を経験できる場、自己決定できる場を大切にしたいという思いをもって、保育実践している姿を見てもらいました。

園長先生は虫博士

園長先生は自然環境センターの教授で動物学の専門家でもあります。講義のない時間に幼稚園に顔を出すと、子どもたちが「園長博士だ」と寄ってきます。幼稚園には自然がいっぱいの森があり、いろいろな虫たちが生息しています。

この日は、朽ちた太い木の枝を見つけた子どもたちが、木の中に潜んでいる虫を見たいと、「博士」のところに集まってきました。木をのこぎりで輪切りにしてもらい、指で中を掘りこんで、蟻や幼虫、小さな虫たちを真剣なまなざしで探していました。見つけた虫は「博士」に写真を撮ってもらい、名前などを調べる楽しみもあります。子ども

たちにとって、園長先生は何でも知っている頼もしい仲間のようです。



園長先生と虫探し

午後は学年別分科会

午後からは研究説明の後、学年別に分かれてテーマを深めました。参加の先生からは、当日の保育や子どもたちの様子、自尊感を育てるための働きかけなどについての質問や意見が活発に出されました。子どもたちが未来に向かって生きていくためには、「かけがえのない自分を大切に思う心」を育んでいってほしいと話し合いました。子どもたち一人ひとりを大切にすること、子どもたちの心の育ちを考える必要性を改めて確認し、有意義な研究会となりました。

小学校

地域教育懇談会・理科フィールドワーク「奈良公園の自然に親しもう」

— 親子・教員・地域の自然観察ボランティア合わせて280名がにぎわう —

附属小学校・教諭

井上 龍一

附属小学校では、「保護者・地域 保護者と地域の参加に開かれた学校に」ということで、3年間、地域教育懇談会を開いてきました。今年度は、親子参加型のフィールドワークとして、6月3日

(土) 9時30分から11時30分の間、「奈良公園の自然に親しむ(飛火野周辺)」を行いました。5月16日から22日の期間に呼びかけたところ、附属小学校の親子と地域からの一般参加も含めて、その数は280名を越えてしまうほどでした。

教育懇談会としては、フィールドワークの道すがら、自然観察をしながら、うちの人同士でいろいろな話をしたり、子どもを通してふれあいを深めたりできたことはとても有意義でした。理科フィールドワークとしても、附小の理科教育を広める、地域の自然を知ることの大事さを働きかけることができた良い機会になりました。

奈良公園はシカと共存する自然としておもしろいこと、その中で、日本の昔からの生き物で成り立っている自然(在来種の宝庫、大木)でもあります。

今回は大勢の人で自然を観察するの

で、3つのグループに分け、飛火野周辺の短いコースを設定し、4つのチェックポイントで、理科部と急遽御願した自然観察ボランティアの先生とで案内する形で進めました。

ポイント1では、年を経るとトゲがなくなるヒイラギ、鹿線を作る木・作らない木について、ポイント2では、キビタキなどの野鳥の声、オオセンチコガネのような糞虫を、ポイント3では、モリアオガエルの吸盤体験やモリアオガエルの卵塊、鹿線のない森の姿を、そして、ポイント4では、特徴的な林床植物として南方系のナチンダ、ひときわ花の目立つヤマゴボウを観察課題にしました。

最後に、飛火野に戻り、まとめの会として、〇×クイズによる自然観察のふりかえり、さらに発展して、たかまどの会から「奈良の自然調べ隊」の呼びかけもあり、賑やかに終えることができました。多くの参加者から感想をいただきましたので、少し紹介します。

子どもたちの感想

「ちょっとあつかったけど、カエルも

見たし、シカも見たし、まつぼっくりも見れて良かったです」(2年生)、「モリアオガエルのきゅうばんがペトツとしていた。ふん虫がすごくきれいだった」(3年生)、「奈良公園の広さがすごく広かったのでびっくりした。知らない花がいっぱいあったので、図鑑で調べてヒイラギの名前を見て調べてみると、なかったもので、ヒイラギの花はめずらしいのかな



熱心にカエルの話を聞く参加者

あ。調べてみたいです。今日は楽しかったー」(5年生)、「いろんな自然のことがわかって良かった。モリアオガエルの卵から無事にオタマジャクシが産まれると良いですね。池に水が貯まるように！カエルがかわいかった」(6年生)。

大人の方の感想

「ディアライン、様々な小鳥など大人でも知らないことが多いですね。みんなと歩くことも少数で歩くより、いろいろ話せて楽しく、先生方がいろいろな準備してくださったこと、ありがたかったです。生ガエルは久しぶりでした」、「森林の乾燥化が進んでしまい、モリアオガエルの池が干上がってしまったのには驚きました。何とかその貴重な森が保存されるように活動したいと思いました」。

このフィールドワークを契機に、地域の方と学校がつながり、地域の自然を知る活動として発展できたらと思います。たかまどの会から「奈良の自然調べ隊」の呼びかけはその第一歩として心強いです。

中学校

「火星探査」からロボットコンテストへ。そして、世界3位に！

附属中学校・科学部顧問

福田 哲也

火星探査から ロボットコンテストへ

本校では、2002年より、アイオワ州のウエストブランチミドルスクールの生徒と「火星探査」をテーマにしたマーズローバープロジェクトをおこなってきました。この活動をしている中でFLL（ファースト・レゴ・リーグ）というロボットコンテストと出逢うことになりました。FLLは、出場者数20万人の世界でもっとも大きなロボットコンテストです。火星探査がテーマではありませんが、今までの活動と類似している点が多々ありました。そして、2005年9月より、本校科学部を中心にFLLに挑戦しました。また、アメリカの中学校もアメリカでFLLの大会に参加しました。

FLLロボット コンテストとは

FLLでは、今年のテーマである「海」についての調査、研究の発表（リサーチ）と、世界規格のシートの上で9つのミッションをするロボットの製作の成果を競



開催国オランダ



ロボットパフォーマンス



優勝したトルコチームと

います。リサーチにおいて、生徒たちは、臨海学習のことや回転寿司のネタやウミガメの生態について調査・研究しました。また、ロボットにおいては火星探査機の製作で培った技術を存分に使い、スピードを重視したシンプルなロボット製作を目指しました。

そして、2005年12月に開催されたFLL近畿大会にて優勝し、さらに2006年2月の全国大会（横浜）においても、各地区の強豪チームと競い合い、トータルプレゼンテーション賞（総合3位）を獲得し、ヨーロッパでの世界

世界大会において

大会に駒を進めることになりました。

世界大会は5月5日から3日間開催され、32カ国の代表である52チームがオランダのアイントホーヘンに集いました。本校からもメンバーの代表3名が参加し、慣れない英語でのプレゼンテーション、さらに強豪がひしめく中でロボットパフォーマンスに挑戦しました。

第1日目は、緊張とロボットの調整不足で十分な結果はでませんでした。2日目は健闘し、総合5位で見事予選

を突破し、決勝リーグに進みました。さらに準々決勝では、8チーム中でトップの成績を挙げ、準決勝へ。残念ながら準決勝で敗れてしまいましたが、ロボットパフォーマンス総合3位という素晴らしい成績を収めました。しかも、日本チームとして、初めてのビッグタイトルの受賞という快挙を本校生徒は成し遂げました。また今回、世界の多くの子どもたちと交流をもつことができたことも、大きな経験になりました。トルコ、アメリカ、ハンガリー、オランダ、イギリス、デンマーク、韓国、シンガポール、中国、ノルウェー...などなど、本校生徒たちはプレゼントである手製のブックマークをもつて、多くの国々の子どもたちと楽しそうに交流していました。このようなつながりが、大きな国際的な視野をもつきっかけになるだろうと感じています。いつかきっと、交流している米国の中学生と、ロボットコンテストの世界大会で逢うことを夢見て活動が続けています。

新入生合宿研修 ―7コースに分かれて実施―

学生委員会委員・文化財・書道芸術コース担当・助教授 大山明彦

大学恒例の行事

本学では例年、教育行事の一環としての新入生を対象とする合宿研修が、各コース毎に執り行われています。本年度も4月の第3～5週にかけて、多くは1泊2日の日程で実施されました。

この研修は新入生と教員が、まず親睦を深め、またこれから卒業までの充実した学びのスタイルについて、互いに確かめ合う絶好の機会となっています。本年はたとえば、「絵はがきスケッチとウォーキング」・「講演・平地林を守る」・「博物館・遺跡見学」など各コースの特徴を生かした様々な企画がなされ、またさらに上回生有志の積極的な参加があったコースもあるなど、まさに大学恒例の行事となっています。

以下に、私の所属している文化財・書道芸術コースの実施状況について、簡略にご紹介させて頂きたいと思います。なお、各々の実施の様子は、本学学生広報であります『天平雲』に、各コースの学生代表執筆によります手記がございますので、併せてご覧いただければ幸いです。

したら幸いです。

文化財・書道芸術コースの場合 ―全員参加で完全燃焼―

本年度からの学部再編によりまして、新入生が37人に増えました。また教員もほぼ全員参加となり、総勢45名。大型バスもほぼ満席という大変賑やかな研修となりました。

初日は、三重県名張、伊賀、滋賀県信楽と史跡や博物館・歴史資料館などが豊富で、しかも公共の交通機関のみの利用では、とても1日では訪ねることが困難な地域を、最大限バスを有効利用して訪ねることができました。

研修執行担当は基本的にローテーションで毎年変わりますが、ここ数年、毎回実施場所が変わります。そのため例年担当となった教員は、たとえば過去に調査研究などで何度も足を運んだ場所であっても、近況把握のため、計画段階で必ず下見をするなど、無駄なく効率よく研修できるよう全力で計画を練ります。本年度も歴史・文化・芸術などに関心を持って集まってきた本

コース新入生にとって、願ってもない絶好の機会となったことと思います。

何よりすごい 教員の自己(満足?)紹介

さて、初日夕食後の懇親会、こどもでも全員が顔を合わせました。まずコース・専修の紹介、学びのルールなどについてのコース代表教員のお話があり、次に新入生の出身地(全国区)のこと、専修を選んだ理由などを始めとする個性豊かな自己紹介がなされました。

そして各教員の自己紹介、持ち時間は各15分程でしたが、「研究分野選択の経緯」、「最新の研究成果」、「幼年期の思い出」、また「初恋の一場面」などなど…。

各教員のほとばしる熱い語りに、学生達はすっかり引き込まれ、一夜にして親子の如くにうち解けることとなりました。

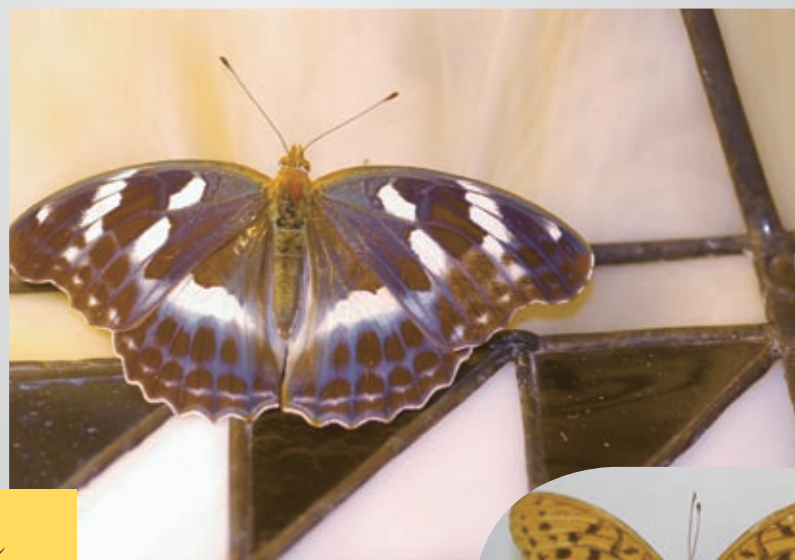
2日目は貸し切りバスの利用が叶いませんでしたが、これまた幸にと、「モ



史跡 信楽宮跡にて

リモリ」と自力で歩くことを前提としての行動となりました。それでもやっぱり、史跡や書道展示美術館へと、今度は専修毎に足を運びました。足腰の鍛錬とともに実地で学ぶ。どこでもどのような状況でも熱心な学びの場、姿勢を貫徹する我がコースの元氣いっぱい、盛りだくさんな新入生合宿研修のご紹介でした。

大学の 仲間たち



和名 メスグロヒョウモン
学名 *Damora sagana ilone*
分類 タテハチョウ科
羽開長 30-40mm くらい



メスグロヒョウモン

豹（ヒョウ）の体のような紋を羽にもつので、ヒョウモンチョウと呼ばれるチョウの仲間がいる。昼間活発に飛翔する中型のチョウの代表であるタテハチョウ科に属し、日本からは11種が知られる。いずれもよく似ているが、わずかな羽の模様や色の違いから、ツマグロヒョウモン、ミドリヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンなどと名付けられている。このうちのツマグロヒョウモンはすでに紹介した。大学構内やこの周辺で普通に見られるのは、ここに名前をあげた3種の他に、メスグロヒョウモンである。もともとこの4種は普通に見られると書いたが、ツマグロヒョウモン以外はそんなに多く見かけるわけではない。ヒョウモンチョウの仲間は雌雄で羽の模様ほとんど違いはないが、本種は例外であり、オスには豹紋があるが、メスの羽には豹紋はなく、名前のように黒っぽく、まったく別種のように見える。幼虫はスミレを食べるので、本学構内でも繁殖している可能性は高いが、私はまだ確認していない。このあたりでは6月中旬から7月中旬にかけてと9月から10月半ばに見られるが、年に2回蛹から羽化するわけではなく、6月に羽化したチョウが真夏には活動が不活発になり、ほとんど姿を見かけなくなると思われている。

（自然環境教育センター長 前田喜四雄）

URL

<http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm>



奈良教育大学 広報誌

第22号 平成18年7月22日 編集／広報・情報公開委員会 発行／国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町 ☎0742-27-9105 ☎0742-27-9141
<http://www.nara-edu.ac.jp> kouhou@nara-edu.ac.jp